

クリスマス・ツリー

作家
太田治子

「まさか、クリスマス・ツリーが、そのまま送り返されてくるなんて」

母は、わが家に向かうバス通りを歩きながら何度もそうつぶやいた。昭和三十年代のクリスマス・イブのことである。近所の倉庫会社の食堂に勤める母を、小学生の私が迎えにいったの帰り道だった。母は、私が幼い日にお世話になったQおばさまの家へ可愛いクリスマス・ツリーを送った。近所の文房具屋さんのショーウィンドーに並べられていた小さなプラスチック製のツリーだった。濃いみどりのこんもりとした枝ぶり

は、金色のお星さまなどで飾り付けをしたら、それは美しく変身するのになかった。

「あのツリーを買いましょう」
数日前に母とその文房具屋さんへ消しゴムを買いにいくと、思いがけずそのような言葉が返ってきた。

「ママ、ありがとう」
とても嬉しくて、思わず店の中をスキップしたくなった。

「そうじゃないの。Qおばさまのところへ、お送りしたいの。あのツリーなら、軽くて郵便局から送るのにも便利でしょう？」
私は、がっかりしてしまった。

わが家にもとはいいだせなかった。母のボーナスはでたばかりだったが、それはボックス型のおもちゃのカメラを買うことで消えてしまった。おもちゃといっても、ちゃんと写すことができるのである。やはり近所のカメラ屋さんで、クリスマス用に売られていたものだった。

「ストロボを付けたら、夜でも撮影できるかもしれないわ。クリスマス・イブに、ケーキと共に記念写真を撮りましょう」

機械にも強い母はそういつはりきっていたのに、クリスマス・ツリーが戻ってくると、カメラのこともケーキのことも何もいわなくなつた。

「Qおばさまの家のA子ちゃん、今年から小学生ね。きつと、もっといいツリーが、もう買われていたのね。それにしても、黙って送り返されるのは悲しいわ」

母は家にいる時も、そういつて涙ぐむのだった。その母の顔をみるのは、つらかった。しかしその一方で、私はツリーが戻ってきたことにほっとしていた。この小さなツリーのてっぺんにお星さまを付けて、ワタの雪でディスプレイをしたかった。母が食堂にいる間に、私は文房具屋さんへ走った。金色の紙のお星さまは、まだ売れずに残っていた。

「まあ、きれい」
部屋の中へ入るなり、母は大きな声でいった。卓袱台ちゆうぶくだいの上にお星さまの輝くクリスマス・ツリーが待っていた。

「さあ、ツリーの前で記念撮影をしましょう。ケーキは、食堂の方からいただいてきたのよ」

母は、すっかり元気になっていった。その年のイブに母が撮影した写真の中の私は、ツリーと共ににっこりと笑っている。

おおた はるか／神奈川県小田原市生まれ。明治学院大学文学部英文科卒業。1986年『心映えの記』により第1回坪田譲治文学賞受賞。主な著書に『絵の中の人生』（新潮選書）、『恋する手』（講談社）、『明るい方へ』（朝日新聞出版）、『石の花』『時こそ今は』（筑摩書房）。最新作は、『夢さめみれば』（朝日新聞出版）。